

# 追放されるスサノヲ像

——〈清明心〉からの乖離——

## 序

スサノヲ像は古事記の中であって、いったいどのように描かれているか——、この問いかけは、そうたやすくひとつの解を導き出せるほどのうすい壁をもたず、たえず我々の〈読み〉の方法の前で大きくたちはだかる。スサノヲ像の複雑性・多面性はもうすでに多弁を要しないし、統一体としての彼の像をどのように組み立て透視しうるかは、だが看過できない問題として、いつも読み手の前に提出されている。

スサノヲのたち振舞いは、〈書かれた〉古事記の中にたしかにあるのだし、我々は、まずはこの書かれた古事記を起点として〈読み〉の方法を徹底化させてゆくことからはじめたい。

小稿は、ウケヒ神話に描述されているスサノヲ像をとりあげる。ウケヒ神話の中にあるスサノヲ像をどのように読みとるか、問題は、当然古事記という古代の認識のありかたに向けてすすむことになるだろう。

森 昌 文

〈海原〉統治を拒絶したスサノヲは、アマテラスに会うべく高天原へ向うが、直ちに高天原篡奪の野心（「異心」・「邪心」）を疑われ、彼は自身の潔白を「ウケヒ」によって証明しようとする。

このウケヒ神話とよばれる話は、どうやらスサノヲの「へ心」のありように深く関わってはじまり、そして終わる。「然らば汝の心の清く明きは何にして知らむ」というアマテラスの問いかけに、スサノヲは「各字氣比て子生まむ」と答える。二神は「天の安の河」を中にはさんでウケヒをし、その結果アマテラスは五男神を、スサノヲは三女神をそれぞれに生んで事の決着がつく。スサノヲは「我が心清く明し。故、我が生める子は手弱女を得つ。これによりて言さば、自ら我勝ちぬ」と言い放って〈清明心〉の証明を自ら下し、「勝佐備」に乗じて「營田の畔を離ち」などの天つ罪を犯し、以下アマテラスの石戸隠り、スサノヲ追放という具合に神話は展げてゆく。

この脈絡から考えれば、ウケヒ神話とよばれるものは、スサノヲの心の側面を把えて離さないわけであり、当神話を解き明かすことはまぎれもなくスサノヲ像の本質部の一端を鋭くえぐり出すことにつながる。スサノヲの心とはいったい如何なるものであったか、又そのように描かれた「心」によってスサノヲはどのような位置を背負わされることになったか。見えにくいものに切り込んで見通しの糸口を切り拓かねばならぬひとつの神話が、このウケヒ神話であると確認しておく。

論の展開上、書紀本文・一書を合わせた計六つの異伝をいま表として掲げた。<sup>(1)</sup>六つの異伝を比較検証することで、古事記ウケヒ神話の独自性はいささかも解消されたりはしない。逆に古事記神話の特殊性をうき彫りにするために、書紀の各異伝を挙げたと付言しておきたい。

周知のとおり、これら記・紀六つの異伝はいわゆる「日神系伝承」と「アマテラス系伝承」の二つの相異なる伝承経路をたどって記・紀に定着されたという。<sup>(2)</sup>古事記がアマテラス系伝承に属するのは言をまたない。ウケヒ実修の神々は、アマテラスとスサノヲであり、書紀六段本文・同段一書Ⅱにおいても同様であってこれらはアマテラス系伝承に属す。そのアマテラス系伝承にある古事記ウケヒ神話の最大の問題は、ウケヒ前提条件にあたる言葉を欠いているのもこれまで広く知られているところである。そもそもウケヒの基本表現は、たとえば当段でみるならば書紀本文のように「如し吾が所生めらむ、是女ならば、濁き心有りと以為せ。若し是男ならば、清き心有りと以為せ」という二者択一的な前提条

件句をもつのが通常であって、古事記の場合この類型表現をきれいにすてている。すてているために古事記ウケヒ神話は、いきなり読み解きにくい特殊なケースとして逆に独自性を呈する。前提条件句の「省略」と単純化する見方は読みを安易にさせるといふよりむしろ「読み」をあきらめた方法と大差なく、この現象にはいまだ少しこだわりをもってよいはずと考える。この点については後述する。

また更に重要な点は、女神を生んでの勝利という筋運びにある。アマテラス系伝承は書紀本文・同段一書Ⅱにもあるとおり、物実の交換をするのだが、<sup>(3)</sup>古事記の場合アマテラスの「詔り別け」からスサノヲは女神を生んだことになる。よってウケヒにスサノヲは勝ったのだとする特異性、この点は決して無視できないものとなる。日神系伝承では男神を生んだことによりスサノヲはウケヒに勝ったとされているのだから、この女神を生んでの勝利はやはり異例といわねばならず、ここからさまざまな論議をよびおこす。稗田阿礼の関与説（阿礼を女性とみる立場から）、女系相統の習俗もしくは母系制社会の反映説等々、古事記の独自性を問いただす第一級の資料価値となつて、ウケヒ神話の重要性にいっそうの拍車をかける。

このように問題点のいくつかをかかえもつ古事記ウケヒ神話、どのように解明されるべきか。たしかめておきたいのはその方法である。方法の軸が揺らげば、解明の途もまた揺らいで混乱をきたす。おそらく当神話の解明態度は、大別して二通りになろう。ひとつの代表的方法は、これら記・紀六つの異伝を分解していっ

文 獻	神 名	ウケヒ前提	物実と 交換の有無	化生神と その帰属	化生神の帰属認定	ウケヒの結果に関する叙述
古 事 記	アマテラス スサノヲ	なし	<div> <div>玉</div> <div>劍</div> </div>	<div> <div>女神3</div> <div>男神5</div> </div>	アマテラス「詔り別け」 ↓ アマテラス ↓ スサノヲ	スサノヲ「我が心清く明し。故、我が生める子は手弱女を得つ。 (中略) 自ら我勝ちぬ」 地の文「勝佐備」
紀 六 段	アマテラス スサノヲ	<div> <div>女</div> <div>男</div> </div> ↓ 濁心 清心	<div> <div>玉</div> <div>劍</div> </div>	<div> <div>女神3</div> <div>男神5</div> </div>	アマテラス「勅」 ↓ 男神 ↓ アマテラス ↓ 女神 ↓ スサノヲ	なし
本 文	スサノヲ	男 ↓ 清心	<div> <div>劍</div> <div>玉</div> </div>	<div> <div>男神5</div> <div>女神3</div> </div>	男神 ↓ アマテラス ↓ スサノヲ	なし
同 右	日 神	心明浄 ↓ 男	劍 ↓	女神3 ↓	なし	地の文「故、素戔鳴尊、既に勝つ驗を得つ。是に、日神、方に素戔鳴尊の、固に悪しき意無きことを知しめして……」
一 書 I	スサノヲ		玉 ↓	男神5 ↓	なし	
同 右	アマテラス		<div> <div>劍</div> <div>玉</div> </div>	<div> <div>女神3</div> <div>男神5</div> </div>	省文あり	省文あり
一 書 II	スサノヲ	女 ↓ 黒心 男 ↓ 赤心	<div> <div>劍</div> <div>玉</div> </div>	<div> <div>女神3</div> <div>男神5</div> </div>	省文あり	省文あり
同 右	日 神	奸 ↓ 賤心なけ れば ↓ 男	劍 ↓	女神3 ↓	なし	スサノヲ「正哉吾勝ちぬ」 地の文「故、日神、方に素戔鳴尊の、元より赤き心有ることを知しめして……」
同 右	スサノヲ		玉 ↓	男神6 ↓	なし	スサノヲ「故、実に清き心を以て、復上り来つらくのみ……吾が清き心を以て生せる児等をば、亦姉に奉る」
一 書 III	スサノヲ			男神6	なし	
紀 七 段	日 神	不 ↓ 善 ↓ 女 清心 ↓ 男	玉 ↓	男神6 ↓	なし	
一 書 III	スサノヲ			男神6	なし	

たいどの伝承が正伝・古伝・原伝であるのかを解る解体論的方法である。たとえば松村武雄は、国生み神話における女神先唱を不吉とする伝承から類推して、男神を以て勝ちとする書紀各所伝に正伝性を認めた。そうした伝承の古層・祖型をたどる方法からは、さらに突込んでササノヲ・ヒルコ説の立論より、皇室の祖先の原型をササノヲにもとめる論考までみるにいたる。<sup>(7)</sup>

一方、こうした解体論的方法から離れて、古事記を一個の独立した作品構造として「読む」立場が、たとえば神野志隆光などに代表される方法であろう。古事記・書紀はともに統一体としてそれぞれ独立してなった作品なのであり、その作品内部のもつ有機的展開を解明して記・紀独自の達成の地点に視座をおくという方法だ。棚木恵子が古事記を「言語作品」としておさえたところで鋭い読みの方に切り込んだのも、こうした認識下から出発したものであった。方法は交錯しながら、読みの階層を深める。小橋は古事記の「読み」に立脚する。ウケヒ神話を読むことによって、いったいどのような物語構想としてのササノヲ像がたちあらわれてくるのか、物語構想とは当然、古代王権の認識のあり方と通底するはずであろう。

## 二

ウケヒ神話は、おそらく二つの軸の連動によって語られているといえそう。一つの軸は、子神の帰属を述べる系譜部にある。この系譜部で特に重要な点は、アマテラスの物実から生まれた五男神の中にオシホミミとアメノホヒが位置づけられていることに

あろう。ホノニギの親神であるオシホミミの出生と、出雲國造の祖神たるアメノホヒとを兄弟神としてアマテラスの子神にくみ込む。この系譜のあり方は、出雲國造を大和朝廷内にとり込む服属の要素の結果として生み出すことになる。いま述べた点はアマテラスを軸にして語られていることを意味し、この系譜部と連動して展開するいまひとつの軸が、ササノヲにスポットをあて、彼の「清明心」を問う神話の場面となる。

古事記には、何故ウケヒ前提条件にあたる表現がみられないのか。土橋寛の考察によればこのようになる。つまり、男・女の識別によってウケヒの結果を判断する場合、「男」を以て「勝」とするのがウケヒの原則であったとみる。「もしA（成功・真実）ならばA'（男）ならむ」「もしB（失敗・虚偽）ならばB'（女）ならむ」となるのが、ウケヒの基本原則であるというのだ。したがってこの場合、「女」→「勝」とすると原則にみあわないので、古事記は前提条件句を省略して妥協策を採ったのだと説明する<sup>(10)</sup>。土橋は神功皇后外征における香椎の浦のウケヒ例を引いてこのように述べるのだが、ウケヒ条件句をもたない古事記の異例を右の一例にすがって省略と断ずるのはどうか。ためらいを禁じえない。

前提条件句をもたない古事記の表現からたしかにいえるのは、ウケヒの「勝」「負」が不透明のまま晒されているという一点のみであろう。ササノヲが女神を生んでウケヒに勝ったと保証できる根拠は、実は彼自身の「我が心清く明し。故、我が生める子は手弱女を得つ。此れに因りて言さば、自ら我勝ちぬ」という発言

と、地の文「勝佐備」の語のみである。この両言葉を以てスサノヲは「清明心」ある神と認定される。古事記のみ女神を生んでウケヒに勝つ、という特殊性を残して——。しかし、この特殊性は女性尊重、重視と古事記との関わり具合の深さをほのめかしながらも、スサノヲは古事記の中でどのように描かれているかという神話内部の読みの地点には、少しもとどかない側面をもつ。かりにスサノヲの清明心を認定した場合、どのような読みの広がりを持てるか。そもそも「清明心」とは何か、ウケヒと清明心とは密接不可分にとけ合って切り離せないテーマになるはずである。

論をもとせば、スサノヲの放ったコトアゲと「勝佐備」のふたつの解釈を確認するところからはじめなければならぬ。

まずスサノヲの勝利宣言であるコトアゲ（「自ら我勝ちぬ」）と近似の記載をもつのは、書紀一書三「正哉吾勝ちぬ」であろう。この一書三の記載は、こうしたスサノヲのコトアゲ後「故、日神方に素戔鳴尊の、元より赤き心有ることを知しめて、云々」と地の文にあるから、スサノヲの心の潔白を確実に証明していることになる。また、ウケヒ前提条件句に「奸賊心なければ男」とあるのだから男神を生んだスサノヲの勝利は動かない。この一書三「正哉吾勝ちぬ」という発言は、アマテラスの物実より誕生した五男神のうちの一神「正勝」（書紀では「正哉」）吾勝勝速日天之忍穗耳命の神名と呼応し合った言葉であるに違いない。だから五男神を生むことで勝利とする神話の筋道には無理がない。おそらく「正勝（哉）吾勝……」といういかめしい神名は、ウケヒ結

果の叙述「正哉吾勝ちぬ」を反映して名づけられたものであろう。反映説の先後論議はともかくとしても、このふたつの言葉は遊離して孤々に存在するはずのものではない。「正勝（哉）」の「正」は、大系本の注によれば神意があらわれて「まさ」に「勝つ」の意となる。「大船の津守の占に告らむとはまさしに知りてわが二人寝し」（一〇九）、「言霊の八十のちまたに夕占問ふ占まさ、告る妹はあひ寄らむ」（二五〇六）等の万葉歌にみるとおり、「正」は卜占と深い関わりをもって使用されている。西郷信綱はこれらの事例により、ウケヒの験がまさ、にあらわれたとして「正」の語義解釈を一步厳密化した<sup>(1)</sup>。たしかにそうであらう。結局、「正勝（哉）」は語義解釈上の微妙なニュアンスの相違を残しながらも、神意がまさしくあらわれて勝ったという意に落着かせて太過ない<sup>(2)</sup>。

ということになれば「吾勝」の主体は当然スサノヲにあるとみてよい。「正勝（哉）」の主体は神、「吾勝」の主体はスサノヲであって、「正勝（哉）吾勝」はこのような両主体をとり込めた言語ということになる。だからこそ一書三のスサノヲはウケヒにまさしく勝ち、自らも「吾勝」と確認を込めてコトアゲしたのであった。一方古事記は「自ら我勝ちぬ」とあって、どういうわけか「正勝（哉）」の文字を記載しない。述べたとおり「正勝吾勝勝速日天之忍穗耳命」という神名は、ウケヒの勝利宣言と深く呼応し合っているに違いないわけだから、古事記の「正勝（哉）」を落としている事象は極めて重大である。つまり「自ら我勝ちぬ」には、スサノヲの勝利が神との関係において相対化されていないわけであり、彼の勝利は神意の裏づけをもたぬ自らの主体において

宣言したものにすぎない。したがって彼の勝利宣言であるコトアゲを以て、スサノヲの「清明心」が証明されたとは決していない。というよりは、むしろその逆を連想して見るべきではないのか。一方、「勝佐備」という語を以てしても、スサノヲを「勝」とするたしかな証左とはなり得ない。

「勝佐備」の語で重みをもつのは、「勝」ではなく「佐備」の方にあるはずだ。「佐備」はスサノヲの名義「荒レスサプ」と絡んで、次文「天つ罪」の行為を引き出す伏線として機能するはずである。また「勝」との関連から考えてみたとしても、たとえば家持に贈った池主の歌「針袋これは賜りぬすり袋今は得てしか翁さびせむ」(四・一三三)にみる「翁さびせむ」の用例は、「翁」でない池主が翁らしくふる舞う意としてあった。こうしたことから照らし合わせばスサノヲ→ウケヒ勝利→清明心の証明、とする読みに疑問をなげかけてもこじつけの論法とはならぬであらう。

### 三

ところで、書紀のアマテラス系伝承(六段本文・同段一書Ⅱ)ではスサノヲの物実より女神が誕生した時、彼の潔白はいずれも明記されず、逆に男神を生む日神系伝承(六段一書Ⅰ・同段一書Ⅲ・七段一書Ⅲ)の場合にはそれを明記する。また書紀本文は女→濁心、男→清心のウケヒ前提条件句をもち、しかもアマテラスの「勅」の中で男→アマテラス、女→スサノヲという子神の帰属が認定されているのだからこれを根拠に萩原浅男・金子武雄は、書紀本文の記載はスサノヲの「負」をあらわしているの

ではないかとみた。<sup>(13)</sup> 一方、三浦佑之も古事記と書紀本文はスサノヲの勝利をどこにも記さないという点から同一構造の語りであるとまず捉え、そして男神Ⅱアマテラスの子、女神Ⅱスサノヲの子と認定するアマテラスの「詔り別け」には、その前提として男→清心、女→濁心という意義が込められているのだから書紀と、そしておそらく古事記もスサノヲはウケヒに負けたのではないかと自説を提起した。<sup>(14)</sup>

古事記を独自の構造体として「読む」立場にある矢嶋泉は、こうした三浦説に反論してこう述べる。もしスサノヲがウケヒに負けたとするならば、アマテラスの「詔り直し」からみて矛盾をきたすというのだ。スサノヲはウケヒに勝ったからこそ、つまり彼の清明心が証明されたからこそアマテラスは恩情ある「詔り直し」をしたのだとする。矢嶋の論の行方は、書紀本文の記載が清明心の有無を意図的に曖昧化する一方で、古事記はその清明心を証明し、なおかつ「勝佐備」という言葉の導入によって岩戸悪行の矛盾をみごとに解消しているとして、書紀・古事記のそれぞれの独自性を読みとるところにある。<sup>(15)</sup> しかしながらこのような「読み」は、いったいどれほど古事記という書物の本質に近づき得るのか。神話展開の矛盾を克服するために「勝佐備」の語の重要性を指摘するのは、プロット上の論理を整理し直したにすぎないだろう。また先の三浦説批判の論拠においても同断である。そもそもアマテラスの「詔り直し」を「恩情」とひとくくりで解釈してしまうのはどうか。大殿祭に、

詞別きて白さく、「大宮のめの命を御名を申す事は、皇御孫

の命の同じ殿のうちに塞りまして、参入り罷出る人の選び知らし、神等のいするこひ荒びますを、言直し和しまして、云々。

という有名な一節がある。この邪神の「荒びます」状態を大宮のめの命が「言直し和し」た、という件りは問題の「詔り直し」を考へる上で参考になる。アマテラスはスサノヲの乱行を「登賀米」るかわりに「詔り直し」すること、スサノヲ事態を和らげようとしたのだ。

以上の理由から、スサノヲのウケヒに勝つたとする根拠は微弱であるわけで、むしろ逆の読みのアプローチを必要とするであろう。ウケヒにスサノヲが負けたと読みとつた場合、どのようなスサノヲ像を見えられるか、問題の所在は〈序〉で既述した提起にたしかえる。

#### 四

いったいウケヒとは本来、事の成否を卜占するものであつて心の清濁を占うものではない。戸谷高明が「簡単にいえば、神意による事の判断」と規定しているとおりである。これはホムチワケ段・オシクマ王反逆段などのウケヒ例を引くまでもなく自明のことだ。つまりウケヒ神話とよばれるものは、ウケヒの二次用法なのであり、〈事〉→〈心〉にとらえかえされた文脈を探ること

は古事記の物語構想を考へる上で、また王権の認識のあり方の一端に迫る意味である。そしてその〈心〉とは〈清明心〉を指示しているのだからなおさら右の提起と密着して離れはしない

テーマになる。

なぜならば〈清明心〉という言葉は、知るとおり「宣命」に用例多く、臣下の天皇に対する忠誠の意をあらわすものであり、同時に〈神〉との関わりにおいて機能するものであるからだ。

敏達紀十年二月と斉明紀四年四月の各条に載る「蝦夷」の忠誠心は次の如く示されていた。

泊瀬の中流に下て、三諸岳に面ひて、水を敲りて盟ひて曰さく、「臣等蝦夷、今より以後子孫孫、清き明き心を用て、天闕に事へ奉らむ。臣等、若し盟に違はば、天地の諸の神及び天皇の靈、臣が種を絶滅えむ」とまうす。 (敏達紀)

鰐田の蝦夷の恩荷、進みて誓ひて曰さく、「官軍の爲の故に弓矢を持たらず。但し奴等、性肉を食ふが故に持たり。若し官軍の爲にして、弓矢を儲けたらば、鰐田浦の神知りなむ。清き白なる心を持ちて、朝に仕官らむ」とまうす。(斉明紀)

この二例にみる〈清明心〉(清白心)も同義とみてよい)はミカドにツカヘルという点で、ともに王権への忠誠心をあらわすものである。そして、もし「盟(誓)ひ」に反したならば「天地の諸の神及び天皇の靈、臣が種を絶滅えむ」「鰐田浦の神知りなむ」というのだから、神・天皇の靈に対して保証せられた忠誠心が清明心であることになる。〈心〉とは不可視である故にたとえ天皇たりとも現し身である以上、臣下の忠誠心をすべてにおいて統御できない。統御できないために、神ないし天皇の靈との関係において臣下の〈心〉を規制する装置はおかれる。このことは宣命の多くの例をみればいっそう明白になるが、たとえば神護景雲三

年・卷三十に載る第四十四詔、道鏡事件の和氣清麻呂段を引いてみる。

冒頭、「詔して曰く、天皇が御命らまと詔りたまはく、夫れ臣下といふものは君に随ひて淨く貞かに明き心を以て君を助け護り、対ひては礼なき面へりなく、後には謗ることなく、姦み偽り諂ひ曲れる心なくして侍へまつるべきものに在り」に始まり、「なほ人は奏さずて在れども心の中惡しく垢く濁りて在る人は必ず天地の現はし示し給ひつるものぞ。是を以て人人己が心を明に清く貞かに謹みて侍へ奉れと詔りたまふ御命を衆諸聞きたまへよと宣りたまふ」<sup>(20)</sup>と流れる文脈には、臣下の天皇に対する忠誠心「淨貞明心」(清明心と同義とみてよい)が強く訴えられている。自らの「妄語」を「神教」だとしたためにキタナマロ・ケガレマロとされた清麻呂は嚴罰に処され、清明心をもちたい者は必ず「天地(天神地祇)」の示現によってあばかれる故、重ねて清明心を以て仕えよと臣下に詔す。

〈言〉と〈心〉の不離密着性を説きながら、神・天皇の靈を絶対化する事によって臣下の〈心〉のあり処をも所有掌握し、神に対する濁りのない忠誠心を誓わせるものが〈清明心〉の本体となる。したがって本来、事の成否を神意に問うウケヒが何故、清明心との関係において述べられているかは、〈事〉あるいは〈言〉と〈心〉がまさに神によって裏打ちされているところによる。この神とは、事の成否を占う本来のウケヒにおいては呪術的卜占要素の濃い超越的汎神なるものであったが、〈心〉との絡みにみる神は「天皇の靈」に密着するところの極めて政治性を帯びた神で

あった。

## 五

スサノヲと〈清明心〉——、如上の立論からスサノヲはウケヒに敗れて清明心を失った神である、そのように古事記を読んだ時、どうなるか。一言にして述べれば、スサノヲは神によって保証されない像として位置づけられているということだ。この場合の神は、広く至上の天つ神ぐらゐにとらえておけばよいだろう。そうしてさらに嚴密化すれば、ウケヒ前段にみるアマテラスとスサノヲの対話、「我が那勢の命の上り来る由は、必ず善き心ならじ。我が国を奪はむと欲ふこそあれ」「僕は邪き心無し。唯大御神の命以ちて、僕が哭き伊佐知流事を問ひ賜へり。(中略)故、罷り往かむ状を請さむを以てひてこそ参上りつれ。異心無し」にみる「善き心」「邪き心無し」「異心無し」と〈清明心〉とは全くの同義ではないだろう。文脈上、〈善心〉〈邪心〉〈異心〉は「我が国を奪はむ」に絡んで述べられた〈心〉であり、一方〈清明心〉はウケヒとの脈絡の中であらわれた〈心〉なのであって、両者の〈心〉を混同してはならないと思う<sup>(21)</sup>。

〈善心ならじ〉〈邪心〉〈異心〉は「我が国」、つまりはアマテラスの主宰する高天原篡奪をはかる心なのであり、そうした心がスサノヲにあるか否か神意を乞うためにウケヒは実修される。いわばこれらの〈心〉は国を奪う反乱であって、政治的力学関係性の内にみる心となり、一方〈清明心〉は神に対して濁りのない心を証明するところの宗教性の中にとり込まれた心である。古事記



に例をみる〈邪心〉（アメノワカヒコ・タケハニヤス・ソバカリ・目弱王各段）は、いずれも国・皇位篡奪の文脈において使用されているし、宣命においても国家反覆心を「惡しき心」（二十一詔）、<sup>いほうだま</sup>「詐<sup>いほうだま</sup>奸る心」（二十八詔）、「惡く穢き心」（四十五詔）、「詔ひ欺く心」（六十一詔）などの不統一の語で述べる一方で、臣下が天皇に仕える心境は「明き淨き直き誠の心」「清き明き正き直き心」「淨き明き心」「貞く淨き心」などの語を以って常套化する。王権は臣下の政治的反逆心の掣肘方法を宗教性の中にもとめ、神を絶対化する事によって臣下の心を統御する。つまり、ウケヒ神話で語られているスサノヲは、高天原篡奪の邪心なく、同時に清明心を欠く像として位置づけられていることになる。

〈大和〉対〈出雲〉という政治的力学関係を前提として、征服・服従の権力構図の読みにせうとうとする立場には疑問がある。それは結果としての読みであつて前提としての読みではない。あきらかにスサノヲには高天原を奪う意志はないのだから、〈邪心〉〈異心〉がなかったとみるべきである。西條勉の説く如く、両者は対立を前提にして語られているのではない。<sup>(22)</sup>しかしながらスサノヲに〈邪心〉のないことは、〈清明心〉の保証を証左するものでもない。そして〈清明心〉を欠くとは神の保証を欠くことになるから、ひっきよう高天原統治の資格欠如を語るものとなる。何故ならば高天原主宰神、あるいはその子孫天皇は臣下に清明心をもとめる以上、自らも清明心を課せられるものとしてあらねばならないからだ。臣下は天皇に清明心を以って仕え、天皇は神に対して清明心を誓う。その神もまた清明心をもちあわせて

いなければ主宰神・統治神として君臨できるはずがない。神聖王権をより強固にするためには、自らの奉斎神をより絶対神聖化する以外ないだろう。こうして清明心を、神——天皇——臣下の縦軸に徹底化させ、この系列からスサノヲを追放しアマテラスを不動のものとして位置づける。ここにウケヒ神話の成り立つ基盤があるはずである。岩戸神話は無秩序性・混沌性をスサノヲに及びせ、高天原主宰をアマテラスに任ずる以外なしとする、ウケヒ神話をより具体的に説明した神話、そう把えてよい。

〈清明心〉とは神に対してもたねばならぬ宗教的的心境を指示し、本来天子が天つ神に誓った詞章なのであつて、後にそれが臣下の宮廷に申す用語となつてあらわれたもの、そう考えたのは折口信夫であつた。<sup>(23)</sup>〈スメラミコト〉はスメル（澄める）人格として聖別された存在であり、〈清明心〉を以って仕えることとの対応関係を説いたのは西郷信綱であつた。<sup>(24)</sup>両氏の考察は、述べてきた論旨より考えて説得性を有したものである。清明心と忠誠心とはほぼ同義でありつつ、しかしながら臣下→天皇との関係においてのみ成り立つのではなく、神・人格を問われる広汎な層に要求された心境が〈清明心〉の実体であつた。

高天原統治の資格ありやなしや、スサノヲはウケヒを実修する。清明心を失つたはずのスサノヲは、自らのコトアゲによって神意をとらえちがひする。「妄語」を「神教」と欺き、清明心にそむいた先の和氣清麻呂の例などを勘案すれば、ウケヒ神話にみるスサノヲ像はより透視しやすくなるのではないか。但しスサノヲの場合、偽り、欺きを前提としたコトアゲではなく、スサブ性に従

って自らの誤ちをおかしたとみななければならない。そしてこのスサノヲ像は、父景行の「コトムケ」を捨て、タケル性に心中して果てたヤマトタケル像<sup>(25)</sup>とも重り合う。スサノヲ・タケル性の排除はどのようにして語られたか、これはコトアゲの解釈とともに「場」との問題にも絡んでくるが別稿にゆずる。

スサノヲを清明心有する神とみてもよい。しかし逆の読みの方  
法も可能であるとするならば、それによってたちあらわれるスサ  
ノヲ像をどのように見すえられるか。問題は「清明心」の有無の先  
にあり。

注(1) この表は矢嶋泉「記紀ヘウケヒ神話」の読み」(『聖心女

子大学論叢』第六十四集)をもとに作成したものである。

なお、矢嶋は萩原浅男「日神・素神の「うけひ」神話の機  
構」(『国語と国文学』昭和三十四年九月)のウケヒ各異伝  
表を参考している。

(2) 小川徹「神代紀の異伝について」(『日本文化史研究』所  
収)。北川和秀「古事記上巻と日本書紀神代巻との関係」  
『文学』昭和五十五年五月)。

(3) 物実交換に関しては種々の見解をみるが、福島秋穂「ウ  
ケヒ神話の構造」(講座日本の神話4『高天原神話』、後に  
『記紀神話伝説の研究』所収)は、アマテラスの「玉」、ス  
サノヲの「剣」を武器の一種として扱え、これを交換した  
とは二神の「悪心無きことを確認し合ったことに他ならな  
い」と述べる。二神は対立を前提にしてあるのではないとい  
う点で示唆に富む考察である。

(4) 阿礼閑与説からは和歌森太郎「古事記と民俗学」(『古事

記大成・神話民俗篇)、三谷栄一「古事記と海人族の伝承」  
(『国学院雑誌』第五十八巻第八号、他の一連の論考)、武  
田祐吉「古事記研究帝紀放」(武田祐吉著作集第二巻)な  
ど、女系相統の習俗もしくは母系制社会の視点からは、た  
とえば次田真幸『日本神話の構成』第二章「誓約生み神話  
の構成と成立」などの論考がある。

(5) 戸谷高明「二神の「うけひ」神話——記紀における原伝  
の問題——」(『学術研究』第十三号、後に日本文学研究資  
料叢書『日本神話』所収)を代表として多くの研究者をみ  
る。横田健一「天真名井盟約神話異伝考——異伝の存在の  
意味とその成立過程」(『日本書紀研究』第四冊)は、その  
表題の示すとおり当神話の原初的形態を探りながら形成論  
へと論及する。

(6) 松村『日本神話の研究』第三巻・第九章「天岩戸籠りの  
神話」。

(7) 泉谷康夫「記紀神話形成の一考察」(『日本書紀研究』第  
一冊)。

(8) 神野志一連の論考。ウケヒ神話に限定すれば『日本書  
紀』の「神代」を読む。瑞珠盟約/宝鏡開始」(学燈社「国  
文学」昭和六十三年七月号)。

(9) 棚木「スサノヲ神話の構想」「スサノヲ神話の構想(続)」  
(『古代研究』第十五・十六号)。

(10) 土橋「天真名井神話の構造と形象」(『国語と国文学』昭  
和六十年七月)。

(11) 西郷「古事記注釈」第一巻。

(12) 土橋寛「ウケヒ考」(上田正昭・南波浩編『日本古代論  
文集』)によれば、氏はウケヒを一定の表現様式による言

語呪術と把え、〈神意〉を知るためではなく「真実」を知るための卜占方法と定義づける。土橋はウケヒを神觀念に關係する狭義の宗教的行爲以前のものとして把握するのだが、「真実」という語の概念規定をも含めいまだ少しわからないところがある。なお検討してみたい。

- (13) 荻原、前掲(1)論文。荻原はスサノヲの〈負〉を断定しているのではないが、疑問(?)として呈示する。金子武雄『古事記神話の構成』。

- (14) 三浦「〈語り〉その表現と構造——「ウケヒ神話」を通して——」(『上代文学』第四十九号)。

- (15) 矢嶋、前掲(1)論文。

- (16) アマテラスの「詔り直し」は言靈の力によってスサノヲの邪惡を弱める呪術行爲だとする見解がある。金子、前掲

- (13) 論文。中西進「古事記をよむ1『天つ神の世界』」。

- (17) 戸谷、前掲(5)論文。

- (18) すでに呉哲男「清明心の発生」(シリーズ古代の文学3

## 新刊紹介

戸谷高明著

『古代文学の天と日』

——その思想と表現——

著者の方法論は副題によく表れている。大陸より移入した借り物の文字と文体で、思想をどう表現しているかという研究は重

『文学の誕生』が考究している。

- (19) ウケヒ→チカヒの歴史的・精神的移行は呉、前掲(18)論文に詳しい。

- (20) 訓み下しは、現代思潮社版『続日本紀』による。

- (21) 佐藤正英「原郷世界への衝迫」(『理想』昭和五十九年五月・六十年三月連載)も同様の指摘をする。

- (22) 西條「古事記」の〈神代〉を読む アマテラス・スサノヲの物語(『学燈社』『国文学』昭和六十三年七月)。

- (23) 折口「道德の発生」、全集第十五巻。

- (24) 西郷「スメラミコト考」(『文学』昭和五十年一月)。

- (25) 拙稿「ヤマトタケル論——「言(こと)」への展開——」(『古代文学』二十五)。

## 〈付記〉

小稿は、一九八八年十二月の古事記学会例会で口頭発表したものをまとめたものです。席上多くの方より貴重なご教示をいただきました。厚くお礼申し上げます。

要であるにもかかわらず等閑に付されてきた。「神話的な觀念による思想とその表現」を「組織的に考察した、いわば報告書でもある」と著者が述べているのは、新しい古代文学研究の方法論を示唆していると言いつても差し支えないであろう。

第一篇には、「天」に関する論文が五篇、第二篇には「日」に関する論文が二篇収められている。第三篇では「空」「星」「天

象・氣象」關係の論文三篇が収められている。取り上げられている文献は、金石文・記紀・風土記・万葉集等古代文献は勿論、平安朝以降の和歌類へも及び、著者の博識を自ずから物語るものとなっている。

(平1・4 新典社 A5判 二三〇頁 七二一〇円)

〔國井文士〕